

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成16年4月5日発行(毎月5日1回発行)  
第44巻4月号(通巻537号)

# 風土

4



利休忌

神蔵

器

われに大志あり三月の大櫓  
利休忌の葦間にきゆる波がしら  
啓蟄や子規居士の墓やや傾ぎ  
衣川ねずみ走りに畦火あぐ  
芹を摘む新鋭の水昂らせ  
新宿に日暮るるバレンタインデー

思ふこと半ばにとどむ冬薔薇  
黒潮に鯛の近づく菜の花忌  
笛鳴武相荘や正子の書棚大たわみ  
胸奥に火のあり多摩の寒葵  
冴返るつんぼになりし仏かな  
線香に火のつく春の霜柱  
ふるさとや亡き兄の出で畦を焼く  
声明のさざなみ縫へり梅三分



曾祖父の武士を捨てたる野を焼けり  
くさめして耳にぬけたる良寛忌  
点眼すくれなるに梅滲み来て  
仙崖の「一円相」や椿咲く  
生国は能ヶ谷村や蝌蚪の陣  
胡麻焚いて炎の芯の冷ゆるかな  
土方歳三愛刀  
兼定の二尺三寸冴返る  
鉢金に刀痕七つ春一番

梅咲くや生涯恋の句一つ

誠山義豊大居士白椿

あをあをと建国記念日矢竹かな

春風の大黒柱抱擁す

目刺焼く新選組を血縁に

「土方」てふ同姓多し葱囲ふ

早春や水車の軸に油さす

雛飾る武蔵国は多摩郡



若 狭

— 田中佐知子

送水会近き鵜の瀬に檜葉の束  
春を待つ鵜の瀬の渦の彫深く  
杜深く縄文椿雪こぼす  
蹲に柄杓浸かりしまま氷る  
雪吊の縄ゆるぎなし禅の寺  
つと匂ふ寒の白百合登美子の墓  
並べ干す僧の草鞋や寒明けぬ  
冴返るかすかに蜷の動きしか  
雪の田を鹿の足あと横切れり  
番所跡雪のもたげし露の臺

雪解の鯖道ははた仏みち  
樽出しの鯖のへしこや春炬燵  
春近し蔓ものの籠編み並べ  
雪代やむかし北前船の川  
葦原にこもる水音春隣  
雪解田を深く鋤きたり御食国  
眼前に海迫りくる芽吹かな  
石仏の蓑のほつれや鯖東風  
残雪の嶺の夕映え干蝶  
如月や堰落つ水の膨めり

# 竹間集

同人作品



三方湖畔

浜

福恵

竿立てて湖を流せり蜆舟  
鴨は陣なさず縄文レストラン  
梅いまだ固し巡りて湖ひとつ  
縄文の里なり水の温むこ糸  
へしこ焼く匂ひを湖へ繁縷萌ゆ  
柴漬や湖一枚の雪解光  
残雪や湖のあなたは越の国

冬木立

蓮尾あきら

松過ぎの机上にきざむ置時計  
水仙をのぞき海鷗をたたせけり  
ふれてみる魚拓一枚春の宿  
ロシヤ語のすれちがひゆく霜夜かな  
悴みて釣りの借り舟戻し置く  
マリナーに過す半日寒の明け  
波音の連れ立ちてくる冬木立

冬木の芽

鈴木とおる

江の島の海見せにゆく三日かな  
さきがけて島に椿の明石瀉  
初夢の亡妻には会はず覚めにけり  
改札に切符を探す寒の入  
初場所や櫓太鼓の川を越え  
雪の果通夜の受付まかせらる  
冬木の芽土がまに火入れ予定表

# 山河集

同人作品



神蔵器選

雪降らず子が出て終る聖夜劇

平田紀美子

絵ガラスのイエスの生涯冬木の芽  
指一本で子が突いてゐる海鼠かな  
近くゐて遥かな人や竜の玉  
数へ日のひと日は父の忌日かな

下山田美江

武者窓に竹刀の音や初雀  
竿竹売り極楽寺坂松過ぎて  
太陽は草の匂ひや干蒲団  
出刃を研ぐ寒九の水にすべらせて  
晩年は数寄屋住ひや梅早し  
湯立神事素足の巫女へ風花す  
宵戎笹の湯立に打たれけり  
滾り湯へ笹振る巫女や宵戎

南奉栄蓮

風花や大前濡らし湯立て果つ  
雪浄土和蠟を削る匠かな

池田光子

桂郎へ一步の遠し冬木の芽  
枯れを来て墓に線香炷きにけり  
霜柱踏んで墓石の前に佇つ  
閑伽桶の水こぼれけり竜の玉  
冬鴟や線香の灰かさなせり

陣野今日子

御輿蔵の日向にこぼれ初雀  
櫟林の底に日の射す寒の入り  
「海童」の高きデツキに初日浴ぶ  
沈金の濤立ち上る雑煮椀  
和賀江港三日の潮目濃かりけり

# 風土独語／神蔵 器



万葉の歌の赤駒初硯 布施まさ子

この句の万葉の歌は

赤駒を山野に放し捕りかたて

多摩の横山徒ゆか遣らむ(巻二十・四四一七)

であろう。作者は豊島郡の十丁かかし椋椅部かあひてつらぶね荒虫が妻宇遲部黒女うぢべのくろめである。歌意は、赤駒を山野の中に放牧して捕えられず、防人として召されて北九州の地におもむく夫に、多摩の横山を歩かせてしまふのさうか、という。「赤駒」は赤毛の馬であるが、万葉集では「赤駒の越ゆる馬柵の結びても妹が情は疑ひも無し」(巻四・五六〇)でも、赤駒は相当に気性の荒い馬とされている。当時の防人は、財力があれば馬も許されていたが、お召が急で放牧してある気性の荒い赤馬は女手では捕えることもできないまま、夫を徒で旅発たせてしまった。作者の豊島郡は現在の東京都西北、多摩の横山は多摩川南岸の丘陵地帯、徒歩で行くには最初の難所である。夫としては馬一頭も貴重な財産、後にのこる妻のためにのこして征つたのであろうが、妻としてはせめて馬で出発させたかったのに何故そうしなかったか、今頃は多摩の丘陵地帯の山坂を足を引きずるようにして歩いているのではないか。

万葉集について称されることばに「ますらをぶり」がある。これは江戸時代の学者賀茂真淵が「古今集」の「たをやめぶり」に

対して名付けたといわれるが、万葉の男性歌人はもちろん、女たちの歌に「ますらをぶり」というのはおかしいかも知れないが、生活者としての感情をそのまま表現する直叙法のみ方であることは女も変わらない。特に防人の妻たちの歌、別れの悲しみは古と同じであるが、想像や感想など入りこませないありのままの真実、つまり直叙法であるため格調が高く、歳月によって色褪せることがない。まさ子さんが新年の書初めに防人の妻の歌を選んだ気持が私はうれしかった。

枯芝へ犬を看取りの灯のとどく しばかやこ

私が最後に飼った太郎(猫)は、書齋の中だけで育った。ハンサムで好男子だが気は弱く怖がり、私が抱いて外に出ても腕の中であばれて引つ掻いたりして飛び降り家に戻ってしまった。あの夜、隣家の方で火のつくような猫の鳴き声、身辺を廻廻しても太郎がいない。信じられなかったが太郎に間違いはなかった。それから数日して太郎は牝猫を追って前の通で車にひかれてしまった。奇跡的に助かり、二度の大手術、二ヶ月余の入院でどうやら元気になって退院して来た。事故の前と変わったところはなかったが、ただ一つ外をこわがる猫ではなくなっていた。そして二ヶ月後、同じところで同じように牝猫を追って行って車に撥ねられてしまった。目撃した理髪店の主人の知らせで駆けつけた時にもう息がなかった。「馬鹿！」と怒鳴ったが箱入り息子、恋は盲目というがあまりにもあわれであった。

掲出句は説明を要しないであろう。「枯芝へ」灯のとどくで、愛犬を看取っているその場の状況がよく出ている。早く元気になって欲しいですね。(以下略)

# 風土集



## 神蔵 器選

万葉の歌の赤駒初硯三鷹 布施まこと

寒椿百畳にぬて抹茶受く  
寒木瓜を剪つて心に炎をともす

売地てふ杭一本に雪降り  
澄みきつて爪を立てたる寒さかな

藤枝 しばかやこ

枯芝へ犬を看取りの灯のとどく  
冬至湯や一湾を曳くホテルの灯

芽柳や風の力を押し返し  
元旦や一筆書きの「出世猿」

平塚 中沢三省

麻酔より醒めたる犬へ寒の水  
初日射す最上階の小児棟

鷹一つ高まりつ翔ぶ初御空  
松過ぎの古書店に買ふ師の句集

まんさくや多摩横山の水の音  
人の世にありて一人や冬桜

寒鯽や湾に轟く雷一つ滑川 折田京子

去年今年米寿へ繋ぎ母眠る  
黄金さす越の山並み初御空

湯ざめしてテレビドラマの中に居り  
里山に暮しの音増ゆ寒の明け

東京 柴田久子

実直な風を探しに凧さげて  
冬の日に捺印の指揃へけり

純白の闇の止まる雪の村  
除雪車の通りしあとの日の窪み

川崎 内藤静

霜晴れや棒一本の猫の墓  
雪吊りの雪を乞ひぬる形かな

左義長の火の粉を逃ぐる楽しさよ  
投ぐるものみな抱擁すどどの火

船送る楽師七人風花す  
冬薔薇の棘やはらかし抜けざりし